

桧洞丸(青が岳, 1600m)へ

西丹沢～ツツジ新道～桧洞丸～石棚山～西丹沢

岩井淑

6月13日(火)曇り

西丹沢のバス停に降り立った人は3人であった。

ほうき沢の集落を抜け、中川川沿いを上っていくと、川原の左岸に2階建ての『ほうき沢山荘』が見える。その上が大石キャンプ場となっており、桧洞丸への登山道の標識が立っているが、今日の登山ルートは、西丹沢自然教室の上部からツツジ新道を択ることになっているので、更に上流へと歩を進める。

県立西丹沢自然教室の手前200m程の所に、淡緑色をしたアーチ鉄橋である西丹沢橋が架かり、下の流れは東沢と西沢を合わせて中川川となっており、そこから教室までの歩道は所々にツリガネニンジン、カタクリ、キキョウなどの花々の絵タイルが埋めこまれ感じが良い。

自然教室に立ち寄り、水をもらおうと係員に声を掛けると、「この水は1度、沸かさないと飲めないよ」「桧洞丸へ登るのだったならば、ゴウラ沢の水を汲んでいけば大丈夫」と教えてくれる。

自然教室の係員に礼を述べ、5分程歩くと桧洞丸への登山道だ。

小さな沢伝いに登り始め、いくつかの木橋を渡り、途中、50～60才代の10人程のパーティを追抜く。東沢を渡る手前に山小屋らしきものの廃屋があつたが、みるも無惨に朽ち果てる寸前である。

ゴウラ沢の出会いから、道は急にきつくなり原生林の中へと入る。鎖も初登場である。自然教室の係員に教えられたように、ゴウラ沢の水を汲もうと岩に足をかけたとたん、ツルッとすべりズボズボと水の中。シマツタと思った時はすでに遅かった。

原生林の中をつづら折りの道はどこまでも続き、視界が遮られているだけに爽快感を味わうことが出来ない。ひっきりなしに聞こえて来るウグイスやコジュケイの鳴き声がせめてもの慰めである。汗が流れるのにまかせて登っていると、『展望台』と標示されているので、10m程わき道にそれてみるが、クヌギやモミジ、ブナの木樹に囲まれて展望はなかった。ガッカリである。薄曇りの木洩れ陽が射しこんでいる林は若やいだ20才の色合である。

1ピッチ30分で登って来ているので2度目の休憩をとっていると、帰路にとる石棚山の西側が崩れ落ち、白い岩膚が露出しているのが見える。手前では1mの近さにコガラが近づき、可愛い眼をしてツイツイピー・ツイツイピーと鳴きながら、体を小刻みに上下させている。

汗はあいかかわらずボタボタ落ち続けており、空は曇ってしまった。

「ツツジ新道」という名前が示すように、桧洞丸山頂に近づくにつれて、ミツバツツジやゴヨウツツジが数を増し、所々に花期を過ぎてしまったが薄紫や白の花が残っている。5月下旬から6月上旬の開化時期に訪れていたならば、それはそれは見事な光景が展開して

いたであろう。

桧洞丸山頂には石の祠が置かれ、横に5月の山開きの際に立られた真新しい安全祈願の白木、登山道の標識、山頂説明板などが立っている。ふたかかえもあるブナの大木がそこかしこに育ち、根元にはバイケイソウやトリカブト、フキ、アザミが覆いつくしている。蛭ガ岳の方向に100m程下った所に青い屋根の『青ガ岳山荘』が建っており、本来ならばその屋根越しに丹沢山塊の最高峰である蛭ガ岳を望むことが出来るのだが、今日は雲の中である。

昼食を食べ終わり、一休憩をしていると急速にガスがかかってきたので、石棚山方面へ下山を開始する。標示板には、ほうき沢まで2時間30分とある。

ケッケッケッと高く跳ねるように鳴く白い眉斑のクッキリしたマミジロ、ポポポポポポポッと鳴くツツドリの声が木霊する。共に夏鳥である。

ツツジ新道への分岐点まで戻ると、朝、追い越してきた実年パーティと再会したが、男性が5～6人増えていた。

「もう山頂まで行って来たのですか？」

「私達がタクシーで登山口へ向かっていた時に、歩いているあなたを追い越したのにアッというまに追い越され、もう食事を終えて下山ですか」

「まったく、脱帽ね」

等々・・・

山頂や山荘の状況を簡単に説明し、一路ほうき沢へと下る。

テシロの頭、石棚山、ヤブ沢の頭を次々に越えるが、展望がよいので帰路に選んだコースも生憎のガスで富士山はおろか、隣の山さえも見えない。

ちょっとつまずけば、もんどりうって頭から転がり落ちるような急坂の連続なので、気をつかいながらただただ下るのみである。5月に設置されたばかりでピカピカに輝いている30m程の鎖が3本取付けられているところもある。その急坂も板小屋沢へ出合う時で終わる。後は沢沿いの道となり、ほうき沢山荘の裏手の杉林の中を歩いて中川川へと戻って来る。

4年前、ヤビツ峠から塔ノ岳・丹沢山に登り、蛭ガ岳山荘に宿泊したことがあった。その山荘から見た夕焼け空と桧洞丸のシルエットがとても美しく、「ヒノキボラマル」という名前も面白く、いつか登ってみようとおもっていたのが今日、実現されたわけである。東丹沢、表丹沢の山々とは異なり、山頂に立ってもまったく展望がないのにはガッカリしたが、同時に、原生林に覆われている山頂こそ人の手が加えられていない本来の姿なのだ、と思う。観光地化されてしまい、登山者の多さのため山頂に水洗トイレが設置されようとしている大山などとは違い、静かなこういう山登りもあるのだと納得する。

帰りに寄った玄倉のバス停から桧洞丸の緑に覆われた山頂が眺められ、2時間前にはあの頂にいたのだなあとの感慨にふけた。